

台灣情報誌

交流

2017年7月 *vol.916*

公益財団法人 日本台湾交流協会
Japan-Taiwan Exchange Association

日本台湾交流協会
理事長就任御挨拶



交流

2017年7月
vol.916

目次

CONTENTS

日本台湾交流協会理事長就任御挨拶 (谷崎 泰明)	1
Computex2017 & InnoVEX2017 レポート〈1〉 注目はSmarTEXエリア, VR, IOT, AI (吉村 章)	2
台湾茶の歴史を訪ねる 第二回 (2)輸出された台湾紅茶 (須賀 努)	8
なぜ台湾プラスチック・グループ(FPG)は 世界第7位の石油化学規模に成長することができたのか(2) (朝元 照雄)	12
片倉佳史の台湾歴史紀行 第六回 高雄(6)―南部横貫公路とルカイ族下三社族群の集落― (片倉 佳史)	20
台湾ランニング事情第7回 第15回舒跑杯(スーパオ杯) (石原 忠浩)	29
日本台湾交流協会事業月間報告	33

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人日本台湾交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人日本台湾交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

●● 日本台湾交流協会について ●●

公益財団法人日本台湾交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も大宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

日本台湾交流協会理事長就任御挨拶

谷崎 泰明

このたび、公益財団法人日本台湾交流協会の理事長を拝命いたしました。我が国にとって重要なパートナー、大切な友人である台湾との実務関係を任されることになり、大変光栄であるとともに、その責任を痛感しております。

日本と台湾との間に正式な外交関係はありませんが、世界に誇れる友好関係と信頼関係があります。当協会が昨年実施した世論調査によれば、台湾住民の80%が日本に親しみを感じると答え、56%が最も好きな国は日本であると回答してくれました。日本人も台湾には親近感を抱いており、駐日台北経済文化代表事務所の調査によれば、日本人の67%が台湾を身近に感じると答えています。今日の良好な日台関係は、多くの関係者の長年にわたる御努力の賜物であり、当協会の賛助会員をはじめとする日台双方の全ての関係者に対し、協会を代表して心より御礼申し上げます。

2011年3月に東日本大震災が発生した際、台湾の方々から破格とも言えるほど大きな支援を我が国に寄せてくださったことは、当時、駐ベトナム大使を務めていた私にも深い印象と大きな感動を与えました。東日本大震災は、胸が締め付けられるほど痛ましい大惨事でありましたが、同時に、私たちの隣にこれほど大切な友人がいたということも多くの人に気付かせ、日台関係における一つの転機をもたらしてくれたように思います。

その後、日本と台湾との関係は急速な緊密化と発展を遂げており、日台間の人的往来は、過去最高記録を毎年更新し続け、昨年はずいぶん双方向で600万人を超え、僅か5年間で380万人も増加しました。わたしが最近勤務したベトナム、インドネシアからも訪日観光客が急速に増加していますが、台湾からの訪日者数の多さはまさに桁が違い、2,300万という台湾の人口規模に照らせば、1年間に420万人もの台湾の方々から我が国を訪れているというのは、誠に驚くべきことでもあります。

また、日台間の各種実務交流・協力を進めるために当協会と台湾側カウンターパート（台湾日本関係協会）が結んだ取決め、覚書等の合意文書は、2012年から2016年の僅か5年間で21本に及び、産業協力、漁業、医薬品規制、鉄道、金融、観光、出入境管理、原子力、防災、二重課税防止、製品の安全性、言語教育等、極めて多岐にわたる分野で、実務交流・協力の枠組みが急速に整備されてきています。日台間では、国民感情の緊密化が実務協力の深化を後押しし、それが民間交流のさらなる拡大を生み出すという好循環が生まれていると言って良いでしょう。



このような日台関係の緊密化を背景として、当協会は、1972年当時から掲げてきた「交流協会」という名称を改め、本年1月から「日本台湾交流協会」として新たなスタートを切りました。これは、かつてないほど多くの方々から日台関係に関心を寄せ、日台間の往来や交流に関わるようになってきたことを踏まえ、当協会としても、我が国の台湾に対する窓口機関として、その存在をより積極的にPRしていきたいという気持ちの表れであります。台湾側のカウンターパートも、本年5月に「亜東関係協会」から「台湾日本関係協会」に改称され、日台双方の窓口機関が期せずしてともに「日本」と「台湾」を冠する組織に生まれ変わりました。

日本台湾交流協会は、平素から協会の事業に多大な御支援・御協力をいただいている賛助会員の皆様、日台関係に関心を寄せていただいている多くの関係者の皆様、そして日本政府の御支援・御協力を賜りながら、日台関係の発展に引き続き尽力してまいり所存でありますところ、何卒よろしくお願い致します。

【谷崎泰明理事長 略歴】

1951年生。東京大学法学部卒。外務省大臣官房総務課長、同総括審議官、領事局長、欧州局長、研修所長、駐ベトナム特命全権大使、駐インドネシア特命全権大使等を歴任。

Computex2017 & InnoVEX2017 レポート < 1 > 注目は SmarTEX エリア、VR、IOT、AI

Taipei Computer Association 駐日代表 吉村 章

今回からシリーズで Computex2017 & InnoVEX2017 をレポートする。まず今回は Computex 概況レポート、次回は VR、IoT、AI など注目を集めた分野について、さらに今年で2年目の開催となる InnoVEX 2017 について、また今年の Computex で注目を集めたさまざまな製品を筆者の視点から紹介していきたい。

■ 1,600 社、5,010 小間、5 月 30 日（火） から会期 5 日間で開催

Computex2017 & InnoVEX2017 の主催は Taipei Computer Association/TCA(台北市電腦商業同業公会)と TAIWAN TRADE CENTER/TAITRA(中華民国對外貿易發展協會)、2017年5月30日(火)から6月3日(土)まで会期5日間の会期で開催された。

出展企業数は1,600社、5,010小間、ACER(宏碁)、ASUS(華碩)、GIGA-BYTE(技嘉)、MSI(微星)など台湾を代表する大手ベンダーはもちろん、中堅・中小企業からベンチャー企業まで会場を埋め尽くした。Computexは毎年6月の第二火曜日が会期初日となるが、今年は1週間前倒しになり、5月30日(火)からの会期となった。

一方、昨年引き続き今年で2回目の開催となる InnoVEX2017 は、2017年5月30日(火)から6月1日(木)までの会期3日間で開催。ベンチャー企業を集めた展示とピッチコンテストが行われ、昨年以上の来場者を集めた。

会場は世界貿易センターがある信義地区と副都心的なエリアとして開発が進んでいる南港地区のふたつ。信義地区では世界貿易センター第1ホールと国際会議センターがメイン会場となり、InnoVEX 2017 は第3ホールでの開催。南港地区は新しい展示会場である南港ホールの1F(グランドフロア)と4F(アッパーフロア)の全ホールを使って開催された。

信義地区と南港地区の間は無料のシャトルバスが運行され、20分ほどで移動が可能。また、市内のMRT(地下鉄)が整備されたことにより、ホテルから会場までのアクセスや会場間の移動が格段に便利になった。さらに外国人バイヤーは事前にバイヤー登録をするとMRTが会期中無料で利用することができる特典があり、日本人のバイヤーにもたいへん好評だった。



出展企業 1,600 社、5,010 小間、写真は南港ホール 4F



5/30～6/3までの5日間の来場者は13万人、写真は世界貿易センター第1ホール

■バイヤー登録は167の国と地域から41,378人

台湾国内外の業界関係者なども含めた総来場者数はおおよそ13万人。この数はほぼ例年並み。しかし、主催者が注目しているのは総来場者数ではなく、外国人バイヤーの登録者数だ。

海外からのバイヤー登録者は167国と地域から合計41,378人。この数字は昨年と比べてほぼ横ばい。一時の勢いは失いつつあるものの、海外からこれだけの数のバイヤーが集まる展示会は日本には例がない。Computexとは海外から集まるバイヤーが台湾製品を買い付けていくための展示会である。最先端の技術に触れたり、トレンドを見たり、情報収集のための展示会ではなく、台湾製品を買い付けるためのトレードショウ、それがComputexである。

具体的な人数は発表されていないが、地域別では中国、日本、アメリカ、韓国、香港、タイが上位の5地域。それにシンガポール、ベトナム、マレーシア、インドが続く。

昨年、民進党への政権交代があり中国からの渡航者制限の影響で中国人来場者が激減した。今年も同様にこの減少傾向は続いているが、それでも地域別統計でみると中国からの来場者が最も多い。政権が変わってもビジネスの世界ではなお中国と密接な関係にある現状は変わらない。来場者数はその実態をよく表しているとも言えるだろう。

さらに、主催者の発表によると、伸び率が高かった地域としてタイ（前年比伸び率30.63%）、インドネシア（22.52%）、インド（20.86%）、ベトナム（20.44%）、およびロシア（14.81%）となっている。特に、民進党政権が打ち出している「新南向政策」によりアセアン諸国からの来場者が増えたことも今年の傾向のひとつである。

これまで台湾は対外貿易に依存する形で産業発展を遂げてきたが、民進党政権は東南アジア諸国

連合や南アジア、オーストラリア、ニュージーランドなどアジア18か国との関係強化を打ち出している。経済・貿易の分野だけでなく、科学技術、文化、医療、観光、人材交流なども含めた多角的な経済交流を進めていく方針である。こうした台湾政府の方針がComputex来場者数からもわかる。この傾向は今後も続いていくことが予想される。

また、出展ブースでヒアリングしてみると、「今年は日本人が多かった」という感想をあちらこちらで耳にした。正式な統計数字は発表されていないが、筆者の推計で日本人来場者はおおよそ3千人。景気の回復を反映してか日本人は例年以上に多かった印象を受ける。

これは日本の景気が回復基調にあることに伴い、企業の海外出張経費も上向していること。さらにComputexの出展製品がIoT分野に裾野を広げていることも日本からの来場者を増やしているものと考えられる。

センサー王国である台湾の実用先端的な技術や製品の開発力に注目が集まっている。ここ数年、来場者がComputexに期待することが変わりつつある。単なる調達先を探す場ではなく、アライアンスパートナーを探す場として、多くの来場者がComputexの見方を変えてきている。日本人来場者も例外ではないようだ。



バイヤー登録者数は海外167の国と地域から41,378人



製品調達のために世界中からバイヤーが集まる、視察／情報収集ではなく商談／買い付けが目的

■南港ホール 4F、さまざまな方向性を模索する大手ベンダー

南港ホールの4Fは最も華やかなエリア。ACER、ASUS、MSI、Benqといった台湾を代表する大手ベンダーが出展。昨年に引き続き今年注目を集めた製品のひとつがGaming PCだ。ハイスペックのグラフィックカードを搭載した高性能モデルや必要十分な機能でリーズナブルな価格帯を実現したモデルなど、各社とも力の入った展示だった。これまで大手ベンダーはノートブックPCやタブレット、スマホなどの端末を展示することが多かったが、今年はパビリオンにゲームの体験コーナーを設置してコンテンツの楽しさをアピールするなど、Gaming PCが主役。この流れは今後も続きそうだ。

一方、ASUSはZenphone ARやロボットの出展、Benqがロボットアームや工場向けソリューションを出展、Mitacは図書館向けソリューション(Hall 1)を出展するなど、大手ベンダーが従来とは違いソリューションを前面に打ち出した製品出展に向かっている。こうした動きは今年のComputexだけではなく、増えていくことが予想される。

また、今年話題を集めた出展のひとつにテスラモーターズの出展がある。自動車メーカーとして本格的な出展はテスラが初めてだ。南港ホールの



ACERの新しいゲーミングブランドPredator(高性能電競桌機)

4Fに実車を持ち込んで注目を集めていた。



MSIのVRレーシングの体験コーナー、ブース全体がゲーミングPC一色だった



ASUSは市販予定のスマホ「Zenfone AR」を発表、



MITACは図書館向けソリューションのひとつとして「本の洗濯機」を出展



Benqはロボットアームや無人搬送システムなど工場向けソリューションを出展



テスラモーターズのブース、Computex 初となる自動車メーカーの本格出展

■ SmarTEX エリアは Computex が最も Computex らしいエリア

第1ホールの SmarTEX エリア (Smart Technology Applications & Products) は最も Computex らしいエリアである。市場への投入を目前に控えた製品や製品のプロトタイプなどさまざまな製品やサービスが出展されていた。4つの分野、Smart Solution (智慧科技解決方案/ 解決方案)、Wearable Devices (智慧穿戴)、Smart Home & Entertainment (智慧居家與娛樂)、Automotive Electronics (車用電子)、Security Application (安全應用) のカテゴリで SmarTEX エリアには今年も140社が出展。

一方、InoVEX はベンチャー企業が集まるエリア。技術力をアピールし、投資家や協業パートナーを探すのが目的である。今年の出展企業数は272社、技術出展からビジネスモデルの提案まで、フランス、オランダ、イスラエル、韓国、日本などの企業が出展した。經濟部や台北市、対外貿易発展協会などスタートアップを支援する団体のパビリオンも設けられ、InnoVEX はアジアで開催されるベンチャーイベントとして国際的にも注目を集めている。



ITRI/ 工業技術研究院のパビリオン、AIでチェスをするロボットを出展



InnoVEX 2017 センターステージで開催されたピッチイベント、ブースには 272 社が出展

■ Computex を 3 つの切り口で見る

大手ベンダーを中心とした最新の製品トレンドを見たい場合は南港ホールの 4 階、IoT 分野の技術とアプリケーションは第 1 ホールの SmarTEX エリア、ベンチャー企業の技術力や新しいビジネスモデルなら第 3 ホールの InnoVEX、3 つの切り口で見るとそれぞれ違った Computex が見えてくる。

バイヤーの視点で Computex を見た場合、もし、製品の買い付けが目的であれば南港ホール（一部第 1 ホール）である。BtoB、BtoC、BtoBtoC など、完成度の高い最新モデルが並ぶ。PC やタブレットなど情報端末から周辺機器やパーツ・コンポーネンツまで、バイヤーのニーズを満たす幅広い製品が揃っている。出展する企業側も製品の販売や海外の代理店探しが目的だ。

もし、IoT や AI、ロボティクスなどのユニークな製品やサービスを探すなら第 1 ホールの SmarTEX エリアである。Computex が最も Computex らしいエリアで、「Computex で何か面白いモノはありませんか」という質問に、筆者は迷わず「まず SmarTEX エリアを見てください」と答える。

中には製品の完成度は低いケースもある。しかし、完成度の高い製品を出展するのではなく、むしろいっしょに完成度を上げていくための協業パートナーや製品の共同開発パートナーを探している企業が多い。言い換えると「こんなものを作っ

てみましたが（プロトタイプ）、誰かいっしょに完成度アップに向けた作り込みをしてくれる人いませんか」という姿勢。出展する側は技術提携パートナーやマーケティングパートナーなど協業パートナーを探す企業が多い。

InnoVEX はスタートアップ企業の祭典である。アイデア段階のビジネスモデル、製品開発の提案、オリジナル技術のアピールなどの出展が多かった。まだ企画の段階だが、投資家向けのアピールや量販パートナー探しという側面も持つ。IoT、AR/VR、AI、ロボティクスなど新しい分野の産業が注目を集めている中で、ますますおもしろくなっていきそうだ。

多少乱暴な表現ではあるが、この 3 つのエリアの製品は「こんなモノを作りました。誰か買ってください」（南港ホール）、「こんなものを作ってみました。この先は誰かいっしょに考えてください」（SmarTEX エリア）、「こんなアイデアを考えました。どうしたらビジネスになるでしょう？」（InnoVEX）と言い換えることもできる。実はここを理解しておくことで Computex がすっきり見えてくる。Computex をどう見るか、見る側の見方によって見るべきエリアを絞り込むことができるわけである。

恐らく「何か面白いモノはありませんか？」と漠然としたイメージで Computex を見る人には「面白いモノ」はなかなか見つからないだろう。広い会場をすべて回ってもなかなか「面白いモノ」は見えてこないはずだ。



Computex で最も Computex のが第 1 ホールの SmarTEX エリア



第3ホールのInnoVEXはアイデアを形にするためのパートナー探し

■ Computex の出展製品は「最先端」ではなく「実用先端」を重視

Computex は最先端技術を競う展示会ではない。誤解を恐れずに言うと、最先端のハイテク製品が出展される展示会ではなく、実用先端的な売れるモノを売る展示会である。市場で求めている製品を台湾ベンダーが世界に供給するための展示会。つまり、Computex には最新技術の自動車の自動運転の展示も、最先端のビッグデータの解析も、8K・16K 技術や第五世代の通信技術の出展もない。最先端を見たいなら、日本の CEATEC (主催社団法人日本電子機械工業会 /EIAJ) やアメリカの CES (主催全米民生技術協会、Consumer Technology Association /CTA) を見に行くべきであろう。

Computex は最先端というより「実用先端」を重視。ハイテクというより既存の技術を使って市場で求められている製品を如何に安く、大量に、すばやく、世界のマーケットに供給していくことができるかを台湾ベンダーが競い合う展示会である。世界中から Computex に集まるバイヤーも今年のクリスマス商戦で何が売れるか、半年後、一年後のビジネスのために何を買い付けたらいい

かを考える。

世界中から集まるバイヤーにとって、Computex は未来を予測するための情報収集の場ではなく、直近の市場で売れるものを探し出すための展示会なのである。高付加価値を求めるのではなく、必要十分な機能でコストパフォーマンスのよい製品を、安く大量に買い付けることが目的。この点が Computex に世界中からバイヤーが集まる理由である。

初めて Computex を視察する人から、「確かに熱気はあったが、展示は期待したほどではなかった」、「出展製品や展示技術に最先端が感じられなかった」、「技術レベルがまだまだ低い。未完成の製品が多い」と言った感想を耳にすることがある。しかし、それはある意味において Computex をきちんと見ていない人（見方を知らない人）の感想かもしれない。

未完成部分を補ってくれる協業パートナーを探すこと、または海外市場で協力して製品やサービスを展開していくための協業パートナーを探すことが出展の目的でもある。逆に見る側も製品の完成度だけを見るのではなく、協業を前提として自社の技術やソリューションとの接点を考えながら製品に目を向けたい。こういう視点を持つと Computex の「面白いモノ」が見えてくる。

出展する企業が狙うのはワールドワイドのビジネス展開である。出展企業が競い合うのは市場が必要としているモノを大量に、リーズナブルな価格で、世界中に売りさばくことである。これが Computex の最大の特長であり、Computex の本質であると言ってもいいだろう。

市場のニーズを早く察知し、開発のスピードを競い合い、低価格で大量に供給する。Computex とは最先端のトレンドを見るための展示会ではなく、半歩先の市場動向を探るための展示会と言える。Computex の面白さはここにある。

台湾茶の歴史を訪ねる 第二回



(2) 輸出された台湾紅茶

須賀 努 (コラムニスト / 茶旅人)

前号では埔里にある紅茶工場を紹介し、その中で台湾紅茶の歴史を当時の日本の取り組みと合わせながら、簡単に見てきた。今回もまた別の地域の紅茶の歴史を取り上げる。やはりお茶は国際的な戦略物資であり、その時々情勢に大きく左右される歴史的な産物であった。同時に外国商人による烏龍茶、華僑ネットワークによる包種茶の後、台湾茶における日本の主導的地位は、この紅茶生産によって確立されたと言えるが、その期間は極めて短かった。

台湾の紅茶はいつから

台湾が正確に何時から紅茶を作り始めたのかはよくわからない。19世紀後半、1860年代に外国商人が台湾に入ってきた過程で、輸出用として紅茶を欲しがったという事実はあり得るが、紅茶が実際に作られていたという証拠は見つからなかった。また台湾の烏龍茶を紅茶と称して輸出した、という話も聞いたが、果たしてどうだろうか。

本格的なスタートは、日本による台湾統治が始まった翌年、1896年に出された茶業試験場設置意向書を見ると、烏龍茶と並んで『志那風紅茶』『印度風紅茶』を試験するようになっており、1903年に安平茶業試験場が開設されると、実際に試験が始まっており、ここから台湾紅茶が始まったと言えそうだ。

1906年にはこの安平茶業試験場の初代所長をしていた藤江勝太郎が漢口風紅茶(紅磚茶)を製造し、ロシアに輸出して好評を博したとの記録が残っていた。静岡出身の藤江は、静岡屈指の茶業者だった父の影響もあり、横浜で緑茶と紅茶の製法を学んだと言われている。同時に早くから台湾烏龍茶にも着目し、1886年には自ら台湾に渡り、烏龍茶の製法を取得したらしい。1895年には出来たばかりの総督府殖産課に技手として赴任、台湾での活動を開始し、日本時代における茶業の基礎を作った人となった。

試験所のいうところの『志那風紅茶』とは、当時中国湖北省からモンゴル経由でシベリア、そしてモスクワ、サンクトペテルブルクまで運ばれていった、紅茶の粉末を固めて作られたブロック型の紅磚茶を指していたようだ。因みにこの輸出ルートは最近中国で話題となっている『万里茶路』と呼ばれる、茶のシルクロードである。台湾で初めて輸出された紅茶がもし紅磚茶であったとすれば、それは相当意外な話ではないか。尚総督府は当初から、茶の輸出先としてロシアを念頭に入れていたようで、何度か台湾茶の市場開拓を民間人に委託したという記録がある。



茶業改良場に残る古い揉捻機

1910年には横浜の砂糖王、安部幸兵衛等の実業家により日本台湾茶業株式会社が設立され、旧来の試験場の製茶施設を借り受け(紅茶製造を委託)、苗栗の茶園を買い取り、初の紅茶専門製造が開始された。ここで作られた紅磚茶は評判もよく、一時は順調に輸出を伸ばしたが、ロシアの革命、そしてインドやスリランカによる大型機械による大量生産による安価な紅茶が出回ると太刀打ちできなくなり、1920年代には、輸出はほぼ停止状態にまで陥ったという。藤江も当初この会社の取締役兼技師長を務め

たが、帰国後は郷里森町の町長になった。

全くの余談ではあるが、実はここに一人の人物を発見した。名前は可徳乾三。この名は九州で日本の国産紅茶を商っている方から以前に質問を受けたことがある。『日本紅茶の祖は静岡丸子の多田元吉と言われているが、同時期に九州熊本で紅茶作りをした男がいたのでその足跡を知りたい』と言われたが、なかなか資料が見付からなかった。

今回の調査で、可徳が日本台湾茶の長老社員として働き、その独自の製法が評価されていたことが分かった。後に魚池で紅茶生産を始める、三庄製茶の取締役、渡辺伝右衛門も若き頃、この会社で働いていたが、可徳のことを回想する文章を残していた。その中には『可徳は紅茶研究の第一人者であり、彼の作った紅茶は海外の市場価格より高く取引された』と書かれている。

1887年には政府の派遣で湖北省漢口に赴き、中国式の紅茶作りを学び、その後ウラジオストックでロシア・蒙古相手に茶の交易をした(日露戦争の影響もありその後破産して台湾に渡った)可徳なら、ロシア向けの紅茶をどのように作ればよいかはよくわかっていただろう。もしやすると、彼がいたから、『漢口式紅茶』が順調に製造・輸出されていたのかとも思ってしまう。いや、元々前述の藤江と可徳は日本か、中国かで知り合っており、製造技術から市場までを語り合っていたのではないかと、と勝手な想像を巡らしてしまうのだが、それは夢の中の話だろうか。

日東紅茶を作り出した大溪老茶廠

桃園県というのは本当に広い。桃園空港から台鉄桃園駅へ行くバスに夕方乗ると約1時間もかかってしまった。そんなに遠いと思っていないから慌ててしまう。そして桃園駅前ユニークというのが適切で、漢字ではない言語の看板が溢れているのだ。タイ、インドネシア、ベトナムなどの料理を出す食堂が立ち並ぶ。それだけ台湾には東南アジアからの出稼ぎ者が多いということだろうが、ここに食べに来

るのは、台湾人なのか、それとも各国人なのか。



観光地となった大溪老茶廠

その桃園駅前のバスターミナルからバスに乗って1時間余り。大溪というところに、三井が建てた老茶廠があると言われて訪ねてみた。1926年に旧名角板山工場として建造され、日東紅茶を大量生産していた場所である。光復後の1956年に大火に見舞われ、59年に再建されたものの、既に最盛期は過ぎており、最終的に95年に生産が完全停止された。

その後は使われることなく放置されていたが、近年観光用にきれいに整備され、週末は家族連れでにぎわっている。1階の一部には昔の製茶機械と共にその歴史が展示されており、2階部分は昔のまま、高い天井に萎凋が出来そうな広々としたスペースがあり、窓枠や手すりなどにその歴史を感じることができる。これぞ、『印度風紅茶』の製造現場である。



1926年当時の角板山工場の写真

三井合名は日本による統治が始まってすぐに台湾

にやって来て、産業調査を開始した。1908年に台湾支所を設立、1920年代には、それまでの磚茶ではなく、インドなどにみられるイギリス方式の、機械化、大量生産によるコスト低下が求められ、1924年に大寮、そして1926年にここ大溪、その後苗栗に三又の茶工場を作り、日東紅茶の名で生産量を高めていき、『ダージリンにも似た香りや味』とロンドンで評判を取ったとある。茶業試験場が紅茶に適したインドのアッサム種を導入したのもちょうどこの頃である。

尚日東とはリプトンの中国語『立頓』と発音が似ているところから付けられた名前との説もあるがどうだろうか。台湾の紅茶は三井が大規模な機械化を進め、優れた品質の茶を作り出し、本格的にスタートしたと言ってよいだろう。

順調だった三井の日東紅茶だが、1937年には三井合名の農林課を発展的に分離独立させ、日東拓殖農林株式会社を設立し、三井合名の茶業、林業などの全ての事業を引き継いでいる。1939年に台湾の新聞に載せられた広告を見ると、『純国産』が謳われ、製造元は日東拓殖、発売元は三井物産、台湾島内の販売は辻利茶舗、と書かれている。光復後、台湾の資産は全て台湾農林に接収され、日東紅茶というブランドだけが日本本土に移されていく。

昭和初期、日本でも中流以上の家庭では紅茶が飲まれていたと聞く。当初はリプトンなど外国からの輸入品であったが、不景気もあり国産品への切り替えが奨励され、静岡や鹿児島で紅茶が作られていたが、(国産紅茶として)この日東紅茶の出現で、一気に拍車がかかったのではないかと思われる。因みにコーヒーはブラジルからの輸入に規制がかかるなど、紅茶が発展する要因はいくつかあったようだ。現在では日東紅茶が台湾発祥であることを知らずに飲んでいる日本人が多いのはなんとなく残念でならない。

台湾資本の台湾紅茶株式会社

台湾には、日本と同じ地名がいくつもある。三重、

板橋、岡山など、どうして付いたんだろうかこの地名、と思うことが多々ある。新竹県には関西という地名もあった。関西鎮、元は『咸菜礮』と呼ばれていたが、日本統治時代に、客家語の発音が似ていたことなどから、関西に改名されたと、珍しい客家料理をつまみながら話してくれたのは、羅吉平さん。桃園県、新竹県、苗栗県あたりは客家の人々が多く住む地域であり、茶業に関わった人も少なくない。



台湾紅茶の展示館で 羅慶士氏、羅吉平氏と

羅さんも客家の一族の出身であり、日本統治時代、関西付近有数の茶工場であった台湾紅茶株式会社(以後台紅)の第4代継承者である。現在の台紅は関西の街中に、『台湾茶業文化館』として、レンガ造りの工場はそのままの姿を留めている。3代目(台湾の『代』とはその一族における世代を表している)で現在ここの館長をしている羅慶士氏に話を聞いた。昭和12年生まれで、流ちょうな日本語で案内をしてくれる。

台紅は1937年に設立された、台湾資本で最大の紅茶工場だったが、それ以前からこの周辺には沢山の茶工場が存在し、羅一族もいくつもの工場を所有していた。これを統合して設立したわけだが、その理由はやはり総督府による紅茶事業奨励と関連があるらしい。前回の東邦紅茶でも見てきたが、当時台湾資本で日本と無関係に独立して事業を進めていくことには様々な困難が伴ったと思われるが、その中で台紅も奮闘していたようだ。『当社はこれまでの歴史で世界の86の港に茶葉を輸出している』と誇ら

し気に、港の名前が刻まれたプレートを指さす。国策事業、外貨獲得である。

前述の三井の日東紅茶は世界各地に輸出されていたが、同じ財閥の三菱は、台紅に目を付け、1938年には羅氏の父親と三菱台北の社員と一緒に、旧満州からモンゴル、ソ連へ出張して、茶葉輸出の可能性を探っていたと話してくれた。当時満州には台湾の包種茶が大量に輸出されており、市場があるとすればソ連で、ハルピン経由で紅茶が輸出された様だ。しかし第二次世界大戦となり、茶の輸出は頓挫してしまった。更に羅家は三菱本社の株も保有していたというが、戦後は株券が紙切れになってしまった、と残念そうに話してくれた。

因みに紅茶製造の技術はどこで学んだのかと聞くと、『近くに三井の工場もあり、そこに働きに行っ』とか、『試験場に勉強に行った』など、やはり日本に学んだことは窺える。またその当時、紅茶生産に使われた品種として黄柑種というのがある。現在では産量が上がらないため、殆ど見られなくなっているが、この品種は広東省あたりから客家が持ち込んだのではないとも言われている。ただ当初は烏龍茶や包種茶作りに使われたが、あまり適していないという評価があり、紅茶作りに利用したところ成果があったらしい。当時の総督府の検討委員会における黄柑種活用に関する議事録を読んでみたが、実に幅広い議論がなされており、総督府の茶業への思いが感じられた。

1945年に戦争が終了し、茶葉の国際的な需要が戻ってきていた。台紅もいち早く生産を再開し、ヨーロッパなどへの輸出を行っていくのだが、ここで大きな問題が持ち上がる。『台湾はどこの国に属しているのか?』、輸出先ではどこの国から茶葉が輸入されるのかを確認するのだが、1945-49年の台湾には帰属するところがなかった。

台湾を独立した国として『Taiwan』と書いて送っても、受け入れてもらえなかった。しかし中国大陸では共産党と国民党が内戦しており、この問題を解決できる人はいなかったのだ、どうしたものかと頭

をひねったらしい。結局政治や外交ではなく、あくまで商人の観点から『MADE IN CHINA』と書いて、輸出していたという。1950年以降は『REPUBLIC OF CHINA』となっているので、その歴史的な意味をプレートから読み取ることができる。尚日本時代は『MADE IN FORMOSA』と書かれたプレートも見受けられ、台湾茶と日本茶は国際社会では区別されていたようだ。



台湾紅茶の展示館に残る輸出用プレート

1950年代は台湾茶、特に紅茶の黄金期だった。長年の苦勞が報われた時期ではあったが、茶は国際的な市況品、必ずしも良い時期ばかりは続かない。50年代の終わりには、既に紅茶の輸出に陰りが見られていたが、その時は、長年取引のあったオランダの会社が3年に渡って大量の注文を入れてくれ、危機を凌いだともいう。台紅は本当に国際的な企業だったのだな、と思うエピソードである。だがそれも長くは続かない。

いずれにしても1960年代はすでに、為替高、コスト高で輸出競争力が無くなっていた台湾の紅茶産業は、70年代以降、長いトンネルに入ることになる。台湾国内では、輸出から内需へ、台湾人が飲むお茶の生産が叫ばれたが、残念ながら紅茶を飲む台湾人は殆どいなかったのだ。その紅茶が復活を遂げるのは2000年代に入ってからで、1999年の921大地震にまつわる話になる。その後、台紅はどのように事業を継続して現在に至ったのだろうか。それは次回以降のテーマとする。

なぜ台湾プラスチック・グループ（FPG）は 世界第7位の石油化学規模に成長することができたのか（2）

—“経営の神様”の王永慶と“第6ナフサ分解装置の父”の王永在の貢献—

朝元 照雄（九州産業大学経済学部教授）

Ⅱ. 台湾プラスチック・グループの海外進出

1958～68年の期間に、王と弟の王永在は台湾プラスチック、南亜プラスチック、台湾化繊の基礎を構築した。1967年にこの3社の売上高は14億台湾元に達した。台湾の石油化学市場に大きな存在感を占めるようになったあと、グループ内の体質調整、所有制度の規程を整備するようになった。台湾プラスチック・グループの生産運営、販売、管理の全面的な制度化、電子化を行い。同時に海外投資のチャンスを求め、海外進出を開始するようになった。1970～90年は台湾プラスチック・グループが海外に進出する重要な20年である。

1970年の初め頃、台湾の外貨の管理が実施され、紡績品の輸出数量の配分額が飽和状態を迎える。台湾プラスチック・グループのビニールシート、化学繊維の生産能力の拡張も飽和状態になった。それが海外進出を引き起こす動機である。アメリカの土地が安く、電力と石油の埋蔵量が豊富であり、アメリカでエチレンジクロリド(Ethylene dichloride:EDC)を生産すると、台湾プラスチックのPVC工場に原料を提供することができるからである。その後、アメリカのスタウファー・ケミカル(Stauffer Chemical)の工場を視察し、台湾プラスチック・グループの経営パフォーマンスの方が優れていることを発見して、アメリカで工場を設置するようになった。

そして、大西洋とカリブ海の間大きな島であるアメリカ領自治州のポエルトリコを考察し、現地の石油の価格はアメリカよりも安いことがわかった。そのために、多くの企業はポエルトリコに工場を設け、製品をアメリカに輸出していた。

要するに、ポエルトリコの石油化学産業の川上段階から川下段階までの垂直統合の雛形が次第に形成されるようになった。この現状を捉えて、海外投資を担当する王金樹と李志村は、ポエルトリコでの工場設置を提言した。王と王永在の賛成を経て、1973年に台湾プラスチックの最初の海外のPVC工場は、ポエルトリコに設置することを確定した。

1974年にニカラグアのアナスタシオ・ソモサ・デバイレ(Anastasio Somoza Debayle、1925年～1980年)大統領が台湾を訪問し、王と会談して投資を呼びかけた。王金樹と李志村は、エルサルバドルを視察したあと、ニカラグアを視察した。その結果、ニカラグアの貧富の格差が極めて大きく、ここの7大家族は全国の7割の富を独占したとわかった。王はニカラグアでの投資のリスクが大きいと感じ、投資を放棄した。

次に王金樹と李志村が訪ねたのがブラジルであった。ブラジルの合成樹脂の市場需要量が多く、アメリカへの輸出に数量制限がない。現地でも競争の大きなライバルがなく、ここで投資すると大きな販路を構築することができると思った。彼らは帰国すると王と王永在にブラジルPVC工場投資計画を提出した。この時期に、ブラジル政府も「PVC工場の国際入札案」を公布した。王は直ちに王永在にブラジルに出張させ、工場投資に適切であるかを確認させた。

1974年に台湾プラスチック・グループはブラジルに工場建設の申請を提出した。当時、ブラジル政府は台湾が地球のどこにあるのかわからず、台湾プラスチック・グループに投資させる価値があるのかを疑っていた。台湾プラスチック・グルー

プはブラジルの商工大臣を招待し、台湾での見学を行った。台湾プラスチック・グループの年間売上高が151億台湾元に達したことが認められ、落札された。台湾プラスチック・グループ、ブラジル国営事業、ブラジル在留華僑林氏と合弁企業を組織するようになった。

最初、ブラジル政府は台湾プラスチック・グループに機器設備のプラント輸入を認めた。のちには、台湾プラスチック・グループに外貨を使い、ブラジルの現地機械企業から機械設備を購入するよう要求した。その場合、現地では関税保護措置があるため、現地で機械を製造すると、コストは2～3倍に跳ね返るようになる。また、当時のブラジルでは外貨管制制度があり、台湾への送金が禁止されていた。

これらの出来事によって、王はブラジルへの投資を断念する意志が芽生えた。この時期に、ブラジル政府は「ブラジルからアメリカへの輸出運賃は、ブラジル政府からの補助金の提供」という折衷案を提出した。もともと王はいかなる補助金の提供にも反対していた。企業が政府による補助金に依存しないと存続できない場合、企業が競争力を持たないことであると王は考えた。また、台湾プラスチック・グループが資金を投入するときに、ブラジルの官僚が賄賂を要求して来た。要求金額は大きくなかったが、このようにブラジルの腐敗した慣習では工場が建設が終わったら、従業員も悪い影響を受けると考えた。王は最終的にはブラジルへの投資を放棄した。

第1次石油危機の勃発以降、ポエルトリコの石油輸入額が大幅に高騰した。それに影響されて、ポエルトリコの石油精製工場の倒産を招いた。同時に、石油化学産業の川下段階の塩化ビニルモノマー(VCM)工場やPVC工場も原料の不足によって、倒産を誘発した。台湾プラスチック・グループのポエルトリコ工場はPPG インダストリーズ(PPG Industries) からVCMを購入したため、

PPGの工場の閉鎖は台湾プラスチックの現地の工場の閉鎖を誘発するようになった。

1975年、王は海外投資のターゲットをアメリカのダウ・ケミカル(Dow Chemical Company)からVCM工場を買収し、アメリカ市場に進出することを決めた。同時に、テキサス州投資の計画を企画した。1977年、アメリカのアライド・ケミカル(Allied Chemical)はルイジアナ州のバトンルーージュ工場を手放したいという意向があった。最初にこの企業と接触したのがイギリスのICIグループである。しかし、ICIグループとアライド・ケミカルの交渉後1年間も過ぎたが、買収案が成立しなかった。この情報を入手した後、台湾プラスチック・グループは買収の意向を示した。突如、ICIグループが買収すると決め、台湾プラスチック・グループは買収のチャンスを失った。ICIグループがこの工場を買収したあと、ICIアメリカ・バトンルーージュ(ICI America Baton Rouge)と名称を変更した。

ICIグループがこの工場を買収して3年間経営しても、黒字化に転換することができなかった。遂に、ICIアメリカ・バトンルーージュの工場長が、台湾プラスチック・グループに買収の意向を訊ねた。台湾プラスチック・グループはこの企業が発行した債券の利子率が低く、買収額が高くないため、買収を決めた。

買収後、この工場敷地の隣のエクソンモービル(Exxon Mobil)は石炭発電所の建設を計画し、ICIアメリカ・バトンルーージュの敷地の一部分の使われていない土地を購入したいと台湾プラスチック・グループに打診した。台湾プラスチック・グループは土地を売却すると、設備の移動や基礎設備の建設が必要であり、もともと売却の意向がないため、思い切って高めの価格を提示したが、1週間後、エクソンモービルは買収すると意思を示した。報告を聞いたあと、「こんな高額を提起したが、本当に売れるなんて」と予想外の成

り行きに王は驚いた。その結果、この土地の売却価格から購入価格を差し引いた分の価格差による売却益の儲け分は、のちには他の工場を買収する資金源の一部になった。その後、台湾プラスチック・グループはスタウファー・ケミカル (Stauffer Chemical) のデラウェア州のPVC工場を買収した³⁵。1982年、台湾プラスチック・グループは1950万ドルで、アメリカ・JM社の8つのPVC川下段階の加工工場を買収した。

台湾プラスチック・グループの対アメリカ企業のM&A(合併・買収)によって、アメリカ市場に進出するようになった。1973年から1983年の10年間に台湾プラスチック・グループは台湾からアメリカに進出し、デラウェア州、ルイジアナ州、テキサス州の工場を次々と買収した。台湾プラスチック・グループの1973年の売上高は151億台湾元で、1983年の売上高は820億台湾元に達し、海外進出の10年間に売上高は4.5倍に増加した。名実ともに台湾最大の企業グループになった。1985年のフォーブス誌 (Forbes) は、王永慶を雑誌カバーの人物として掲載され、台湾プ

35 台湾プラスチック・グループによるスタウファー・ケミカル (Stauffer Chemical) のデラウェア州のPVC工場の買収に、以下のようなエピソードがあった。台湾プラスチック・グループの商談代表は李志村である。双方は互いに価格交渉の相違を示した。スタウファー・ケミカル側は価格を引き下げたくなく、李に電話を王董事長にかけるかと尋ねた。李は王のサイン入り価格欄には空白の小切手を見せて、提示した価格で受け入れない場合、直ちに台湾に帰国すると返事した。スタウファー・ケミカル側は、李が王を代表して契約を決められるのかと訊ねた。決定する権限を持つ場合、スタウファー・ケミカル側は直ちに理事会を開催すると答えた。同時、李に台湾プラスチック・グループの理事会の開催がなくてもいいのかを聞いた。李は既に理事会から契約決定の権限を与えられたので、別途に会議を開催しなくていいと返事した。この返事にスタウファー・ケミカル側はビックリしたと言われている。姚惠珍、前掲書、時報文化出版、2015年a、110～111ページ。

ラスチック・グループがアメリカでの運営成果を紹介した。氏の名声は全米に知られるようになった。

1989年、テキサス州政府からの誘致によって、台湾プラスチック・グループは30億台湾元を投入し、年産68万トンのエチレン工場、24万トンのVCM工場、36万トンのPVC工場を建設した。台湾プラスチック・アメリカ、南亜プラスチック・アメリカ、台湾化繊・アメリカを次々と設立し、テキサス進出計画を推進した。1994年、テキサス工場の操業が開始され、台湾プラスチック・グループはテキサスで知られる台湾企業になった。テキサス州政府は台湾プラスチック・グループの進出を感謝し、毎年5月19日を「王永慶の日」(Y.C. Wang Day)と制定している。

Ⅲ．海滄計画の撤退

1970年代、公営企業の中国石油が第2ナフサ分解装置の操業の開始前に、台湾プラスチック・グループは原料不足のため、日欧米から原料を輸入していた。しかし、価格の波動が大きく、そのために、台湾プラスチック・グループは石油化学産業の川上段階に向かって、ナフサ分解装置の建設によって垂直統合を試みていた。1973年1月、スタンフォード大学フーヴァー研究所の嚴演存博士に委託し、ナフサ分解装置の建設可能性の評価を行った。嚴演存は行政院経済安定委員会時代(1953～1958年)に工業委員会化学工業組長(局長)³⁶を歴任した人物である。

ナフサ分解装置の建設を図る場合、海外の大企業と競争できる大規模装置を建設すべきであると王は考えていた。中国石油の第2ナフサ分解装置の設置のあとに、台湾プラスチック・グループが

36 台湾の経済計画機構について、董安琪(朝元照雄訳)「経済計画機構と政府の役割」朝元照雄・劉文甫編『台湾の経済開発政策：経済発展と政府の役割』勁草書房、2001年、第2章および付録に詳しい。

第3ナフサ分解装置の建設した場合、台湾のエチレンの不足問題を解決できると王は主張していた。しかし、台湾プラスチック・グループの第3ナフサ分解装置の建設案は、当時の孫運璿経済部長（経済相）から支持を得ていない。主な理由は公営企業の中国石油からの反対である。1981年、マスコミの取材に「この独占事業は台湾プラスチック・グループに任せることができない。第3ナフサ分解装置は公営企業が担当するよう堅持する。それは蔣経国総統の指示に従ったのだ」と証言していた。

台湾プラスチック・グループが1972年に第3ナフサ分解装置の建設案を政府に提出したが、政府から承認されず、1986年、台湾政府は台湾プラスチック・グループに第6ナフサ分解装置の設置をようやく認めるようになった。しかし、1986年に建設が認可された後、1992年に麦寮の建設地に決定するまで、二転三転の苦難の連続であった。

最初は宜蘭の利澤工業区で建設の予定であったが、住民の反対運動によって挫折するようになった。次に選んだのが、桃園の観音郷であるが、やはり住民の反対運動でダメになった。そして、嘉義の鰲鼓も住民の反対運動によって建設計画は白紙に戻った。最終的に雲林の麦寮に決まったが、建設地の操業開始まで約10年間もかかった。

利澤工業区と観音郷工業区の第6ナフサ分解装置の建設に住民の反対運動を受けた後、王は海外進出を加速するようになった。アメリカに積極的に進出したほかに、1989年11月30日、王は中国に渡航して視察し、投資のチャンスを伺った。12月5日、鄧小平は人民大会堂で王と会見し、台湾プラスチック・グループの中国での投資に協力すると承諾した。これは「901工程」と呼ばれ、のちの福建・アモイでの「海滄計画」であった。1990年1月11日、王は2度目の中国入りで、香港啓徳空港で航空機の乗り換え時に台湾のマスコミ

に偶然に遭い、台湾プラスチック・グループの中国での「海滄計画」の実施の情報がマスコミから報道された。

台湾政界は驚き、政府の上層部は怒った。当時の台湾政府は「三不政策」(中国共産党と接触せず、交渉せず、妥当せず)³⁷を実施していた。明らかに、王の対中投資は台湾政府の逆鱗に触れたのである。

1990年6月、王は3度目の中国訪問時に、「海滄計画」について、北京政府に11項目の要求を提出した。同時に、台湾の郝柏村行政院長（首相）は会議で第6ナフサ分解装置の建設を積極的に支持すると発表した。1992年10月、北京政府は王に「海滄計画」の11項目の要求が認められたと連絡した。11月5日、王は北京で国务院の朱鎔基副総理と面会した。王は海滄計画で製造した製品を中国で100%販売できる要求を提出した。朱は海滄計画の製品の全数輸出から中国での販売への変更（当初の申請では製品の全数を台湾や海外に輸出）に不快感を示した。しかし、海滄計画による製品の中国の内需向け販売が、中国の天然資源の損失回避だけでなく、外貨の支出を節約することができるかと王は示した。翌日、中国は王の要求に同意し、釣魚台国賓館で盛大な宴会を開催し、王などの一行を招待した。同時に、海滄計画の契約を締結するようになった。

この時に、王は郝柏村行政院長からの伝言を受けた。いったん中国と契約を結んだ場合、台湾政府は台湾プラスチック・グループの証券取引を停止させ、銀行との資金往來を停止させ、台湾プラスチック・グループの上層部の出国を制限させるという「郝三条政策」を実施すると脅した。それによって、台湾プラスチック・グループは「海滄計画」を放棄するようになった。その後、王はアメリカに2年間も“滞在”（避難）した。この

37 朝元照雄『現代台湾経済分析』勁草書房、1996年、第8章に詳しい。

2年間に王の弟の王永在が台湾プラスチック・グループのすべての責任を取り、「王者の風貌」を示すようになった。

当時、マスコミは台湾プラスチック・グループの第6ナフサ分解装置の投資に反対されたために、中国で「海滄計画」を実施すると見られた。そのことによって、台湾政府の上層部は王を許せなかった。長年にわたり、王永在は自ら経営した長庚ゴルフ場でプレーし、もともとは李登輝³⁸総統と面識があった。李総統の親友・何既明医師は淡水ゴルフ球場の会長を務め、王永在の長年の友人であった。王永在は何既明医師の同伴で李総統住居の鴻禧山荘に行き、謝りと同時に、長庚ゴルフ球場でプレーするよう誘った。そして、再三にわたり、台湾プラスチック・グループが台湾での投資の決意を強調した。それによって、李登輝総統と王永慶との心のしこりが次第に氷解することができ、のちに台湾政府が台湾プラスチック・グ



図3 王永在

38 李登輝総統と何既明医師は戦後の台湾送還の船で初めて面識を得て、何既明医師は東京大学医学部卒で、李登輝は京都大学卒である。船内で天然痘が流行し、基隆港に上陸ができず、2人は船中での交流で60年の親友になった。二二八事件・白色テロ時、李は何宅の籾摺工場（籾から籾殻を取り除いて玄米に仕上げる工場）に1週間も避難した。上坂冬子『虎口の総統とその妻』文春文庫、2001年に詳しい。

ループに対し、より積極的に支援するようになった。

IV. 第6ナフサ分解装置の設置

1991年、第6ナフサ分解装置の建設候補地の選択に、王永在、長男の王文淵と廖泉裕雲林県長（県知事）の同伴で、「風頭水尾」と言われた麦寮に視察した。70歳の王文在は強い東北からの季節風で体が揺らされ、口を開くと口の中は砂だらけになった。建設地を見ると、一面の広い海である。廖県長が海を指すと、海辺に1つ1つが500ヘクタールの広い魚の養殖場が見え、しかし、陸地らしきものが見られない。これを見て、王文淵は落胆した。

会社に戻ったあと、王永在はアメリカ滞在の王永慶に電話をかけ、麦寮の実態を報告した。王永慶曰く、「ここでは見えないので、君に任せるよ」と返事した。王は中国アモイの「海滄計画」で台湾政府から注意され、アメリカに“滞在”（避難）していた。事実上、第6ナフサ分解装置計画の全工程の建設時に王はアメリカに滞在していたため、この計画は完全に王永在の貢献であることがわかる。

この時期に第6ナフサ分解装置の建設が始まり、歴大な財務の圧力を受けた。第6ナフサ分解装置の建設には5,000億台湾元の投資資金が必要で、この計画に失敗すると、台湾プラスチック・グループの経営の根幹に大きな影響を及ぼすことになる。事実上、第6ナフサ分解装置計画の建設地の二転三転で計画の実施が遅れ、多くの設備は既に注文済みで、工場いっぱいに入庫され、計画の運営に必要な人員の雇用も決まっていた。仮に計画を実施しない場合、設備と新規募集人員の費用がまるまる損になり、仮に実施するといばらの道を歩みと分かっていた。「まるで頭を半分洗い、最後まで洗うしかなかった」と王永在は当時の心



図4 第6ナフサ分解装置（台塑石化）

情を語った。数日間の悩みの結果、王永在は麦寮で第6ナフサ分解装置を建設すると正式に発表した。

1993年に第6ナフサ分解装置の建設は具体的な企画段階に入り、工場建設の用地の獲得と開発、水源の供給、融資と金利、水道の敷設および港湾と外部との連絡道路などの8つの課題が発生する。しかし、当時の法規の制限を受け、絶えず政府と交渉する必要があった。同年3月21日、江丙坤・経済部長（経済相）と蕭萬長・経済建設委員会主任委員（閣僚）が共に王文在を訪ね、経済相の任期期間に第6ナフサ分解装置の推進に全力に協力すると約束した。

1994年7月5日、台湾プラスチック・グループは経済部（経済省）から「第6ナフサ分解装置および第6ナフサ分解装置拡大計画の土地使用同意書」を獲得した。政府から正式に認可され、第6ナフサ分解装置の建設が全面的に開始した。第6ナフサ分解装置の多くの設備は既に1986年に購入し、建設用地が決まらないため、8年間も工場に保管していた。それに莫大な財務の圧力に加えて、王永在は「4年間に第6ナフサ分解装置の完成」の目標を制定した。最大の課題は、いかにして4年間に2,225ヘクタールの海を埋めて陸地化に変更することができるのか。しかも、麦寮に20以上の工場建設が期限通りに完成できるのか。

王永在のポリシーは、「仕事は実地で行い、口で話すものではない」である。

2,225ヘクタールの海を埋め立てて陸地化に造成するという大規模工事は、世界でも稀なケースである。全工程の埋め込みに砂土の量は1億915万立方メートルで、台湾北部の基隆から南部の高雄まで全長373キロの3階建物8車道の高速道路の建設に使う砂土量に相当する。基礎の埋め込みに使う棒杭の延べ長さは450万メートル以上で、コンクリートの使用量は839万立方メートルに達する。要するに、「十大建設」国家プロジェクトの1つである南北高速道路相当の建設が、一民間企業が4年間で完成させたことを意味する。また、麦寮埋立地に第6ナフサ分解装置を含む20以上の工場建設の完成を考えると、いかに大変であるかが想像できる。

海の埋め立て、地質改良と第6ナフサ分解装置などの工場建設が同時に進行されることも稀なケースである。麦寮の埋め立てと第6ナフサ分解装置計画の建設に王永在は、1994年～1998年の連続4年間に2週間に1回に麦寮現場で工程計画の建設会議が開催された。麦寮に行くときは朝3時40分に起床、4時20分に出発、7時に麦寮に到着する。毎週の会議で進展状況を検討し、最速の手段で問題を解決した。「すごく大変だった」と、



図5 麦寮港

王永在は当時の感想を述べていた。³⁹

1998年に麦寮の第6ナフサ分解装置が計画通りに操業が開始され、台湾プラスチック・グループが世界級の石油化学企業になる出発点である。1998年に第6ナフサ分解装置の操業開始の後、台湾プラスチックの利益は操業前の200億台湾元未満から2007年の3,277億8,800万台湾元に達した。その後、2008年のリーマンショックの影響で利益が一時的に186億台湾元に大幅に低下した。しかし、第6ナフサ分解装置の操業後から2013年まで16年間の年平均売上高は1,347億台湾元に達していた。第6ナフサ分解装置の建設成功によって、1つの石油化学基地の売上高が世界最高記録の偉業を築きあげたことになった。台湾プラスチック・グループの全グループの売上高は1997年の3,382億台湾元から2013年の2兆4,553億台湾元に達した。売上高のうち、第6ナフサ分解装置の寄与度は7割を占めていた。

第6ナフサ分解装置の建設などは、台湾プラスチック・グループの自社で解決することができた。しかし、銀行からの融資、水源の供給、水道水の価格の計算、工業専門港湾の建設のための土地財産権の獲得など、政府部署との交渉による解決すべき課題が多く存在していた。これらの課題解決

39 姚惠珍、前掲書、2015年a、22ページ。姚惠珍『継承者們：台塑接班十年秘辛』時報文化出版、2015年b。

などの政府との交渉は王永在が自ら担当した。

水源について、かつて、李登輝総統は水田などの灌漑・排水用に使われる集集堰堤を建設する計画があった。しかし、コストパフォーマンスが悪いため、実施されなかった。台湾プラスチック・グループは政府に援助を求め、李総統が建設を決めた。それによって、雲林県界の濁水溪南岸から用水路で、第6ナフサ分解装置などに水源を供給するようになった。

資金について、第6ナフサ分解装置の第1期工事に2,000億台湾元の投資が必要であった。最初から国内法規の制限を受け、台湾の銀行からの融資の場合、各銀行の売上高の5%を超えてはいけない制限があった。台湾の銀行の売上高規模が小さく、全ての銀行が「売上高の5%」を融資しても、第6ナフサ分解装置の建設に必要な資金を満たされない。仮に海外から融資額を台湾に送金した場合、政府が規定した課税の問題に直面する。その場合、コストが高すぎて第6ナフサ分解装置の建設費では負担しきれない問題が発生する。そのために、台湾プラスチック・グループは政府に第6ナフサ分解装置の融資の件を説明した。交渉の結果、政府は一民間企業の第6ナフサ分解装置の建設を「国家重大計画」に指定し、銀行からの融資額は売上高の5%の制限を受けないことを承認した。政府からの特別認定の措置は、後には「台

湾プラスチック条例」というレッテルが貼られ、擲擲されるようになった。最終的には、交通銀行など台湾国内の40数社の銀行の共同で、1,400億台湾元を第6ナフサ分解装置の建設に融資した。これは台湾の銀行界で史上最大の民間融資である。

そのほかに、第6ナフサ分解装置の建設は法令の制限を突破し、港湾建設が認められた。当時の法規によると、港湾埠頭の建設は政府機関、国営機構や農漁牧業業者のみが建設することができ、一般の民間企業は港湾埠頭を建設することができない。しかし事実上、漁業者が港湾埠頭の建設に投資する 경우가少なく、逆に、石炭や石油の運搬用の産業港の需要が大きい。最終的に、台湾プラスチック・グループは政府官僚を日本の視察に訪ねた。多くの国の港湾埠頭は、民間が建設・所有することが可能であることを明らかになった。明らかに、台湾現行の法規が遅れていた。経済の国際化、自由化を追求する時期では、法規の緩和を行わないと、グローバル化という世界の法規に合致することができない。それによって、政府から台湾プラスチック・グループの産業港の港湾埠頭の建設が認められた。

第6ナフサ分解装置の総投資額が5,744億台湾元に達し、この期間に、王はアメリカに滞在していたため、王永在が殆どの重任を負った。それは王永在が「台湾プラスチックの守護の神様」（台塑守護之神）や「第6ナフサ分解装置の父」と呼

ばれる所以である。1994年～1998年の連続4年間に王永在は麦寮に100数回行き、225回の会議を主催した。王永慶が一生のうち麦寮に行った回数は10回未満である。しかし、人々は台湾プラスチック・グループと王永慶を連想し、王永在を連想する 경우가少ない。

事実上、王永在は王永慶の忠実な「執行者」であり、王と共に「台湾プラスチック・グループ王国」を築いた「策定者」である。長庚記念医院や海外の5大信託基金のうち、王永在家族は半分の所有権を掌握している。

「王永慶董事長は敬慕する経営の神で、王永在は私たちと肩を並べた作戦の戦友である。対外的に董事長が発言しているが、対内的に董事長の晩年は企業の制度だけを管理し、企業文化や重大投資、運営の多くの事は王永在が言えば決定する」と、王永在の告別式である上級幹部が述懐した。「当時、王永在は不眠不休の努力で、私たちを感動させた。そのために、皆一生懸命に第6ナフサ分解装置を建設した。現在、第6ナフサ分解装置は既に世界級のプラントであり、台湾の石油化産業に奇蹟を創造した」と、南亜プラスチック最高顧問の呉欽仁は王永在の告別式で目を赤くして感想を述べた。⁴⁰

40 姚惠珍、前掲書、2015年a、26ページ。吳祈忠「品牌價值評估：以台塑石化為例」高雄應用科技大學商務經營研究所碩士論文、2009年。王炎仁「企業成長演變策略：台塑企業之探討」台灣大學商學研究所碩士論文、1994年。

片倉佳史の台湾歴史紀行 第六回

高雄 (6)

—南部横貫公路とルカイ族下三社族群の集落

片倉 佳史 (台湾在住作家)



台湾南部最大の都市である高雄市。日本統治時代に開発が進んだこの街は世界でも指折りの規模を誇る港湾都市である。今回は南部横貫公路と知られざる原住民族・ルカイ族の下三社族群について紹介してみたい。

山岳部を横断する南部横貫公路

3000メートル級の山々が連なる中央山脈。そこを横断する南部横貫公路は素晴らしい景観が続くことで知られている。最高地点は2722メートル。沿線にはスギやヒノキなどの巨木が原始のままの姿で林立しており、高山ならではの絶景が連続する。

中央山脈を越える道路は、北部横貫公路、東西横貫公路、そして南部横貫公路の3つのルートがある。その中で、最も素晴らしい景色が楽しめるのがこの南部横貫公路である。ただし、台南と台東を結ぶ路線バスは廃止されてしまい、公共交通機関による走破はできない。そして、本稿執筆の時点では自然災害によって一部区間が不通となっており、山越えそのものできない。

南部横貫公路の前身となるのは日本統治時代に整備された「警備道路」である。これは原住民族の人々を監視することを目的に設けられ、「理蕃道路」とも呼ばれた。南部横貫公路は終戦まで「関山越（かんざんごえ）警備道路」と呼ばれていた道路に沿って敷設されている。

関山越警備道路の工事は1921（大正10）年に始まっている。完工は1931（昭和6）年だった。そして、全長182・6キロの南部横貫公路が開通したのは1972年10月31日のことだった。

関山越警備道路の西の起点は六龜（ろつき）である。ここから甲仙（こうせん）を經由し、中央山脈を越えた後、台東側に出て、海端（ブヌン語ではハイトトワン）に到っていた。沿線に集落は少なく、しかも、集落を除けばほとんど無人に近いエリアの

間を道路が貫いている。この状況は戦後も変わることもなく、南部横貫公路の沿線人口は非常に少ない。



玉山国家公園遊客中心（ビジターセンター）がある梅山口から大関山隧道までの区間には日本統治時代の道路跡が一部だけ残っている。梅山集落の様子。

平埔族の人々が暮らした土地

南部横貫公路の正式名称は省道20号線である。省道としては台南市玉井区を起点とし、甲仙で六龜・美濃（みのう）・高雄方面からの道路と合流。その後、山越えを果たし、台東側に出る。先にも述べたように、現在は梅山～向陽間が不通となっており、本稿執筆の時点では山越えができなくなっている。

玉井は言わずと知れたマンゴーの郷である。旧名は「タバニー」といい、1915（大正4）年に発生した抗日蜂起・タバニー事件で知られている。現在はマンゴーをはじめとする果実の栽培で知られ、1950年代にアメリカ合衆国のフロリダから持ち込まれた苗木を改良したアップルマンゴー（中国語名は「愛文芒果」）の一大生産地となっている。

甲仙はタロイモの産地として知られている。ここ

は平埔族（平地に暮らす原住民族の総称）が文化を残す地域となっており、隣接する南化（なんか）や左鎮（さちん）、そして、山上（やまがみ）では、現在もなお、平埔族に属するシラヤ族の祭典が行なわれ、文化・伝統の継承が熱心に進められている。

シラヤ族は台湾の南部の平野に暮らし、大きな勢力を誇ったが、16世紀頃から漢人系住民との混血が進み、部族としてのアイデンティティを失っていた。日本統治時代が始まった1895（明治28）年頃には漢人文化への同化がかなり進んでいたが、この地域は彼らの文化を知る上で、重要な意味を持っている。

シラヤ族の集落には「公廨（こうかい）」という名の集会所があり、祭事や祈祷、集会はここで行なわれる。台南市の左鎮や南化、山上、そして、高雄市の甲仙などにはこういった公廨が今も残り、調査と研究が進められている。

2009年8月、台風8号は台湾南部に大きな被害をもたらした。台湾ではこれを「八八水災」と呼ぶが、同年8月9日早朝に発生した土石流は高雄市甲仙区小林村を呑み込み、犠牲者は500名におよんだ。この小林村もまた、平埔族の文化が色濃く残る集落として知られていた。



平埔族の中で最大勢力を誇ったシラヤ族。その集会所とも言うべき公廨が今もいくつかの場所に残っている。

ブヌン族が多く暮らす土地

宝来温泉は沿線最大の温泉郷である。温泉街らしきものがあるわけではないが、道路に沿って、い

くつかの温泉ホテルがある。この辺りから先は原住民族の人々が多く暮らしている。

連載第5回で紹介したように、南部横貫公路一帯にはブヌン族の人々が多く暮らしている。高雄市桃源区の一部地域ではサアロア（ラアルワ）族の人々が暮らしているが、人口は少なく、ブヌン族との同化も進んでおり、伝統文化は消滅の危機に晒されている。また、甲仙の北側に位置する那瑪夏（ナマシア）区にはカナカナブ族が暮らしている。

桃源区に入ると、より険しい山道が続く。道路は舗装されており、整備は行き届いていたが、一部区間で「八八水災」の傷跡を目の当たりにする。「地形が変わってしまった」という表現が決して大げさなものでないことを思い知らされる光景が続く。

梅山のあたりでは植生が温帯性のものになっている。ヒノキが見られるのはここよりもさらに高山地域に限定され、南部では珍しいシダ植物の類も多く見られるようになる。ただし、現在、この先は通行止めになっており、その様子を見ることはできない。ここまで来ると全くの無人地帯となっており、人工物が見当たらないという光景が続いている。

南部横貫公路の最高所は大関山隧道の中にある。海拔2722メートル。日本統治時代にはトンネルはなく、警備道路は上方を走っていた。現在も一部ながら痕跡を留めているが、廃道となっており、整備はされていない。

大関山隧道付近には「関山越」という名の由来にもなった関山（標高3668メートル）をはじめ、向陽山（標高3603メートル）や塔関山（標高3222メートル）、関山嶺山（標高3176メートル）、ハイノトナン山（標高3175メートル・現在の名称は海諾南山）、ウハノシン山（標高3115メートル・現在の名称は庫哈諾辛山）、などが点在する。隧道の名称となっている「大関山」とは、現在は「塔関山」という名になっているが、隧道名にのみ、かつての呼称が残っている。

トンネルの手前には「檜木谷」と呼ばれるスポットがある。日本なら天然記念物に指定されそうな巨

木があたりまえのように林立する光景は圧巻だ。この辺りは冬場に寒気団が流れ込むことがあり、北回帰線の南に位置しているながらも、結氷を見ることがある。稀ではあるが、年によっては積雪を見ることがもあるという。

なお、南部横貫公路の旅のクライマックスは現在不通となっている大関山隧道を抜けた先にある。一気に視界が開け、前方に見わたすかぎりの雲海が広がっている。息を呑むような絶景で、時間が経つのを忘れてしまいそうな美しさだ。

一刻も早い復旧を祈りたいところである。



宝来温泉。南部横貫公路一带には温泉も多く、泉源は10箇所を超えるが、温泉街らしい施設があるのは宝来温泉だけとなっている。



関山越山岳道路。1924年に発行された台湾総督府の30万分の1の地形図。梅山口～向陽間は現在不通。

ブヌン族の人々と台湾総督府

南部横貫公路の沿線に多く暮らすブヌン族の文化については別の回で詳述する予定だが、ここでも簡単に触れておきたい。

ブヌン族は長老を中心とした父系社会を形成し、勇猛果敢なことで知られる。集落の決定事項は長老による合議制で決める。厳格なしきたりを持ち、武勇を尊ぶことでも知られている。

現在の人口は約5万人となっている。南投県を中心に高雄市山岳部、花蓮県、台東県に居住しており、かなりの広範囲である。ブヌン族には5つの氏族というべきグループがある。卓社群(タケ・トド)、カ社群(タケ・バカ)、丹社群(タケ・ヴァタン)、巒社群(タケ・バヌアド)、郡社群(タケ・イスブクン)となり、高雄市の山岳部に暮らしているのは、現在、ブヌン族の最大勢力となっている「郡社」の人々である。

ブヌン族は部族意識が強く、勇猛果敢であったこともあり、領台当初から、新来の統治者である台湾総督府との間で葛藤が繰り返された。抗日事件は各

地で発生し、台湾総督府はその鎮圧に力を入れていた。特に1914（大正3）年からは武器の押収を強化したが、ブヌン族の勢力範囲は広範で、思うようには進まなかった。対立は長期化し、当時の文献などにはブヌン族が暮らす地域を「台湾で最も物騒な地域」と記すケースもよく見られた。

そんな背景もあり、警備道路はブヌン族の勢力を削ぎ、追い詰めることを目的に設けられたと云っていい。中でも関山越のルートはブヌン族勢力の包囲網の軸となっていた警備道路であった。



南部横貫公路の沿線にはブヌン族の人々が多く暮らす。「米呼米尚」は「ミホミサン」というブヌン族の挨拶の言葉を漢字表記したもの。

ルカイ族の人々

ルカイ族について述べておきたい。彼らは中央山脈の南寄り、その東西に跨って暮らしている部族である。総人口は約1万3168人となっている（2017年4月・原住民族委員会統計）。

ルカイ族は大きく3つの集団に分けられる。まずは中央山脈西側の隘寮渓流域に暮らす「西ルカイ」、濁口渓流域に暮らす「下三社」、そして、中央山脈の東側に位置し、呂家渓流域に暮らす「東ルカイ」である。西ルカイと下三社は海拔500～1000メートル程度の土地に住み、東ルカイは呂家溪が形成した扇状地に住んでいる。

この3つの集団の中で、勢力が最も大きいのは屏東山岳部に暮らす「西ルカイ」であり、通常、ルカイ族と言えばこの人々を示す。また、台東県に暮

らす「東ルカイ」は発祥の伝説に従うと、西ルカイの人々が移住していったものとされる。

「下三社」についてはとりわけ複雑な背景を持っている。まず、下三社の人々が暮らす茂林区は西ルカイや東ルカイの居住地とは接しておらず、やや離れている。さらに、古くは山岳地帯のより奥まった地域に暮らしていたが、移住政策によって、現在の場所に移ってきたという経緯を持つ。そのため、同じルカイ族とは言っても言語や習慣などについてはかなりの相違が見られる。

ルカイ族の特色として、階級社会となっていることが挙げられる。これはパイワン族にも見られるもので、頭目（酋長）と貴族、平民の階級がある。三者は世襲制となっているが、男性については、平民であっても、才能と努力で上の地位を取ることが可能とされる。つまり、身分にかかわらず、戦闘で敵の首を取ることや、大きな獲物を獲得することで、長老による合議を経て、勇士の地位が与えられる。

ルカイ族の集落では、集会所や首棚、水源、墓地などは共有財産とされ、樹木や花、家畜、魚などは



ルカイ族は百歩蛇という毒蛇と深い関わりを持っている。また、髪飾りや服飾品、彫刻などは蝶をモチーフとしたものが少なくない。

貴族の財産とされる。そして、貴族は平民から税を取ること、狩猟や採集を認める。農耕地についても貴族の所有であり、平民は貴族に収穫量の一部、具体的にはイモとアワを納める。

また、ルカイ族は「家」の単位で集団が構成されている。そして、家屋は長男が継承することが基本となっている。

複雑なルカイ族の呼称の変遷

ルカイ族の呼称は日本統治時代、原住民族の分類上、いくつかの変遷を経ている。領台初期、ルカイ族は「ツァリシアン（ツァリセンとも）」※と呼ばれていた。これは彼らが非原住民族、つまり漢人系住民に対し、ツァリシアンを自称していたため、伊能嘉矩が1899（明治32）年に著した『台湾蕃人事情』の中では部族名として用いている。

しかし、その後の研究で、森丑之助や伝承伝説の研究で知られる佐山融吉などは、文化的類似性から彼らをパイワン族に組み込み、ツァリシアンはパイワン族の一支族とした。

昭和時代に入ると、移川子之蔵（うつしかわねのぞう）や言語学者の小川尚義（おがわなおよし）、浅井恵倫（あさいえりん）が言語と系図から判断し、やはり、パイワン族とは別個の部族として、ルカイ族とした。なお、ここには居住地が離れており、文化的には相違点が多いとしながらも、下三社をルカイ族に含んでいる。

さらに後、鹿野忠雄（かのただお）はルカイ族を文化的類似性からパイワン族に再び取り込んでいるが、一方で、人々の自我意識にも着目し、ルカイ亜族は「西ルカイ」、「東ルカイ」、「下三社」に明確に分けられるとしている。

なお、ルカイの自称は「ルカイ」というのが一般的だが、非原住民族に対しての自称は「ツァリシアン」を用いるのが普通だ^{*}。また、東ルカイは自称を「タルマク」という。そして、下三社については三つの集落の名をそのまま自称としている。

※本来の意味は「高地に暮らす人々」。日本統治時代の文献には「ツァリセン」と記されることが多いが、ここでは原語の発音に近い表記を採用している。

パイワン族とルカイ族

ルカイ族は当初、パイワン族に含まれていた時代があった。実際、両者ともに貴族と平民の階級社会であり、習俗・習慣については似ている部分はある。しかしながら、言語的には差異があり、そもそも双方に同族意識はない。縄張り争いなどが発生することも少なくはなかった。

パイワン族との差異を挙げるなら、最も明らかなのは頭目の地位を継承する際、パイワン族は男女の性を問わずに長子が次代頭目となるのに対し、ルカイ族はあくまでも男子がその地位を継承することであろう。つまり、パイワン族には女性頭目の出現があり得るが、ルカイ族の頭目は必ず男性である。

衣装についても、黒を基調とするのは共通しているが、百歩蛇をデザインに取り込むことが多いパイワン族に対し、ルカイ族は壺やユリの花、蝶が多い。

余談ながら、ルカイ族は原住民族の中で最も平均身長が低いとも言われている。これは居住地が隣接しているパイワン族やプユマ族の人々が見知らぬ人をルカイ族であるかどうか、識別する際に用いる判断基準なのだという。まずは相手の身長をみて、次に顔と眼が丸いかどうかを見れば、ルカイ族の人であると判断できるという。筆者もこういった話をパイワン族の集落で何度も耳にしたことがある。



食文化についてはパイワン族とルカイ族には共通点が多く見られるが、やはり細部では異なる点が多いという。

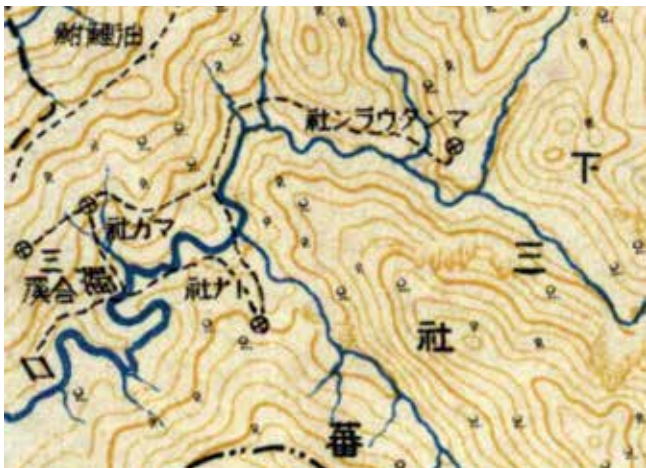
集落によって言語が異なる下三社の人々

高雄市西部の山岳部にある茂林区は人口 2000 人に満たない自治体である。住民の大半を原住民族が占めている。長らく、高雄県茂林郷と呼ばれていたが、2010 年 12 月に高雄県が高雄市に編入され、高雄市茂林区となった。

茂林区にはトルドゥカン（漢字では「茂林」と表記。通称は「マガ」）、オポノホ（同じく「萬山」。通称はマンタウラン）、コガダヴァン（同じく「多納」。通称は「トナ」という 3 つの集落があり、これが「下三社」を形成している。

興味深いのは、3 つの集落はそれぞれ独自の言語を持っていることだ。しかも、どの言葉を見ても、西ルカイ語や東ルカイ語とは違いが見られる。トルドゥカン（茂林）とコガダヴァン（多納）の言葉には近似性が見られるものの、3 つ集落の中間に位置しているオポノホ（萬山）は大きな差異があるという。

異集落間のコミュニケーションが不便ということで、会話には西ルカイ語が用いられる。そして、日本統治時代には日本語が、戦後の中華民国体制下では中国語（台湾式北京語）がコミュニケーション言語となっていたため、言語事情は複雑なものになった。現在、若い世代は中国語を常用し、部族の固有言語は衰退が著しい。一方で、数は少なくなっているが、日本語を常用する高齢者も見られる。



1924 (大正 13) 年発行の 30 万分の 1 地形図。マンタウラン (オポノホ・萬山) がマガやトナよりも山深い位置に記されている。



茂林区にはいくつかの景観スポットがある。龍の頭のような形をした龍頭岩。



蛇の頭に似た蛇頭岩。

下三社の集落を訪ねる

下三社の人々はトナ（多納）を除くと、古くからこの場所に暮らしていたわけではない。為政者によって移住を強いられ、山深い故地から移ってきた人々である。そのため、隣り合わせに見えても、3 つの集落間に歴史的な繋がりがあったわけではない。

茂林区の入口に当たるのがトルドゥカン（茂林）集落である。通称は「マガ」でこちらの方がよく用いられる。「茂林」というのは終戦間もない頃にこの土地を治めた陳茂林という人物にちなんでいる。

なお、この地はルリマダラ（紫斑蝶）が集団越冬することでも知られており、世界的に珍しい自然生態となっている。集団で越冬する蝶は世界でもメキシコのオオカバマダラと当地のルリマダラだけとなっている。これについては連載第 4 回を参照されたい。



マガ（茂林）はルリマダラの集団越冬地として知られている。11月から3月までがシーズンとなる。



山肌に広がるオポノホの集落。茂林区内でもとりわけ人口の少ない集落となっている。

独自の文化を誇る「萬山（オポノホ）」

萬山は現地では「オポノホ」と呼ばれる。漢人からはマンタウランと呼ばれ、この呼称が長らく用いられてきたが、現地では「オポノホ」の名が用いられる。これは集落名のみならず、集団としての自称でもあり、人々には独自の部族意識がある。人口はわずか450名ほどの集団だが、意識の高い人々である。

オポノホの人々がこの場所に移住してきたのは1956年のことだった。中華民国政府の移住政策に従ったものだった。遅れて移住してきたために、トルドゥカン（茂林）ともコガダヴァン（多納）とも言語や習俗は異なる。

ここは山腹を走る道路から下側に集落が広がっている。メインストリートとなる「萬山巷」はとにかく急な坂道で、斜面に沿って横に家屋が並んでいる。その様子は独特で、一見の価値がある。

オポノホの言語は使用人数が少なく、また、生活の現代化や中国語の普及によって、まさに消滅の危機にある。現在は言語の記録と、母語教育が熱心に行なわれている。



茂林区へは本数は少ないものの、旗山から路線バスが出ている。

石板を用いた 伝統家屋が見られる「多納（トナ）」

最も奥まった場所にあるのが多納である。通称は「トナ」。現地では「コガダヴァン」と発音するが、日本統治時代は漢人がこの地を呼ぶ地名に従い、「トナ」と呼ばれた。他地域に暮らすルカイ族も「トナ」と呼ぶことが多い。

ここは移住経験がなく、独自の伝統文化が色濃く残っている。粘板岩質の石材を板状に切りだしたスレート（石板）を用いて造られた伝統家屋をいくつか見ることできる。門柱や壁面に「百歩蛇」が描かれている家屋があれば、それは住人が貴族階級で

あることを示している。また、石板にカタカナが記されていることがあるが、これは表札であり、記されているのは人名である。

また、毎年11月下旬には「タパカラワン（黒米祭）」という祭典が催される。これは収穫を神に感謝し、悪霊を払うというもので、下三社の中でもここだけに見られる祭事である。

なお、かつては濁口溪沿いに温泉が湧き出ており、行楽地となっていた。泉質は弱酸性炭酸泉で、河原に湧き出たこの温泉は野趣満点で、人気を博したが、現在は水害によって立入禁止となっている。



トナ（多納）では表札がカタカナで記されていることもある。



茂林区には3つの集落があり、これ以外はほぼ無人地帯となっている。豊かな自然景観を満喫できる土地でもある。



トナ（多納）の入口にある石碑。下三社の人々は集落ごとに独自の言語を持つ。



トナ（多納）の家並み。スレートを用いた家屋が今も残っている。



トナ（多納）に残るスレート家屋。現在は文化遺産にも指定されている。



夕暮れを迎えたトナ（多納）。青年人口の流出が深刻な社会問題となっている。

ルカイ族の言葉

ルカイ語は発音が複雑で、カタカナで表記することはできないが、参考までに「お元気ですか」という表現は以下のようになる。

マギイームスー（茂林）

サリヴ・オー（萬山）

イッヴイニョニャーソ（多納）

モディギアインギスー（霧台・西ルカイ）

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『古写真が語る 台湾 日本統治時代の50年』（祥伝社）、『旅の指さし会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『台湾に残る日本鉄道遺産』（交通新聞社）など。2012年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がけるほか、台北生活情報誌『悠遊台湾』を毎年刊行。最新刊は『台湾で日帰り旅 鉄道に乗って人気の街へ』（JTBパブリッシング）。『観光コースでない台湾・南部編』（高文研）を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>

台湾ランニング事情第7回

第15回舒跑杯(スーパオ杯)

石原忠浩(台湾・政治大学日本研究プログラム 助理教授)
(元(財)交流協会台北事務所専門調査員)

台湾の春夏秋冬は短く、夏だけがひたすら長い。台湾での経験上、台湾でのフルマラソンのシーズンは12月から3月までと定義し、4月から6月までの時期のレースも8時前に完走する時間帯のレースしか出場しないようにしている。その「前提条件」に適い、エントリー費100元というコスト・パフォーマンスの高さを誇るレースである「舒跑杯」(スーパオ杯)に出場した。

1. 大会の歴史沿革と概要

「舒跑」とは、1956年に成立した台湾の大手食品会社の維他露食品が販売するスポーツドリンクのブランド名である。同社のホームページによると創業者が1981年当時の台湾当局がスポーツの振興を大きく掲げたことで、スポーツが流行し、新たな市場が生まれるとの予見をし、台湾人向けのスポーツドリンクである「舒跑」を開発、販売したところ、同飲料はヒット商品となり、同社の発展に寄与したとの説明がなされている。

「舒跑」のブランドを用いたロードレースの開催も、同飲料発売後の翌年1982年に本社のある台中で第1回レースが開催されている。台中における舒跑杯は、昨年11月まで35回開催され、参加者3万人という有数の規模を誇る。歴史のあるロードレースとなっている。舒跑杯は今世紀に入り、2002年以降は台北市で、2015年以降は高雄市でも開催され、台湾の北中南部を代表する三都市で開催される一定の知名度を有する人気レースに定着している。

表1は、ランニングレース関連のサイトなどから、整理した最も間近に開催された台北、台中、高雄の舒跑杯の概要をまとめたものである。

台湾北中南部の中心都市で開催される同レースは、例年台北で5月、高雄で10月、台中で11月に開催され、いずれのレースでもシリアスランナー?もエントリーする10キロ前後のレースとFun Run的な3キロレースの二本立てになっている。距離が台北で12.5K、高雄が9.7Kというのは中途半端ではあるが、同レースは電子チップを使用しないレースのため、スタート地点或いはゴール地点を移動させ、10Kなど区切りの良い距



スタート直前の様子

表1 舒跑杯の概要

	台中舒跑杯	台北舒跑杯	高雄舒跑杯
最近のレース	2016年11月13日	2017年5月14日	2016年10月16日
種目、制限時間、参加人数	9K(90分 12000人) 3K(50分 18000人)	12.5K(120分 8000人) 3K(30分 12000人)	9.7K(90分 7000人) 3K(30分 8000人)
エントリー費	100元	100元	100元

離に合わせることをしていないのかもしれない。この辺の大雑把なところも台湾らしいと言えるのでしょうか。

このレースで特筆すべきなのは、冒頭でも紹介したエントリー費の安さにある。日本のレースとは比べるまでもないが、ここ数年は毎年のようにエントリー費が値上がりしている感のある台湾のロードレースの中でも依然として格安のカテゴリーに入るレースである。100元(約360円)という価格は我々、台湾庶民が昼食時に食べる弁当が60～80元ということを勘案すれば、日本的感覚では1000円くらいではないだろうか。この費用で写真のように、ドライ素材のランニングシャツとタオル(十分に使用に耐える物)、600ccのスポーツドリンクが付いてくる。また、レース後には自ら容器を準備し好きなだけスーパーオが汲めるお持ち帰り自由のサービス(宣伝?)もある(写真参考)。そのような気楽さもあり、筆者も練習気分と刺激も兼ねて今回で3年連続の出場となった。



参加商品

コースは、昨年以前の大会では、台北市政府を出発し、仁愛路を西方向、総統府方面に向かい、中山南路で折り返す往復コース(9K)が利用されていたが、今年から変更となった。今年のレースでは、台北市内で度々使用されるコースではあるが、総統府前のケダガラン通り(凱達格蘭大道)を出発し、中山南路を横切り仁愛路に入り台北市

政府方面に進み、金山南路で左折、しばらく進み「新生高架橋」という自動車専用道路に入り、北上し、淡水河を越え、圓山飯店を右に眺めつつ、士林夜市に近い劍潭で高架橋を降りきったところで折り返し、同じ路を戻る往復コースである。このコースの良い所は、全線完全に交通規制がなされている点である。

なお、本レースは台湾のロードレースで定番となっている上位入賞者への賞金は無く、男女各20位までは記念品と入賞の盾のようなものが贈呈されている。いずれにしろ、無賞金レースということで「賞金狙い」のケニア勢の姿は皆無であった。

2. 当日のレースの状況

6時スタートのレースの場合、6時に動き出す地下鉄を利用しては間に合わないため、ほとんどの参加者がタクシー、バイク、レンタサイクル(U-Bike)を利用する。筆者の当日は4時起床、軽食をすませ、5時にタクシーに乗車し、15分で現地到着。すぐに荷物を預けトイレも済ませ、30分前にはスタート現場に向かう。整理スタートではないため、前の方の好位置を確保するには早い者勝ちとなる。総統府をバックに三々五々と参加者が眠そうな顔をしながらも集まり、今レースの「2017 舒跑杯」のランニングシャツを誇らしげに着用し(台湾のレースでは参加者の半数以上が主



ペーサー 2

催者提供のシャツを着用している感じがする)、スーパオの看板やキャラクターと記念写真撮影に興じる人々で溢れかえっている。

スタート地点には黒字のランニングシャツに「Pacer」とかかれたシャツに「1時間」、「1時間8分」、「1時間15分」というゼッケンをつけた集団が出現していた。ペーサー（配速員）である。その中に、政治大学の運動会のトラックレースで競ったことのある知人を見つけ、雑談。同人は、昨年ベルリンでSub3を達成したエリートランナーだが、最近の台北市内のレースではペーサーのお手伝いもしているとのことだったが、今回の件は「急に声がかかった」とのこと。確かに、ペーサーのことは事前の大会要項には載っていなかった。しかし、そのSub3氏は最速ペースの「50分」(1キロ4分ペース)ゼッケンをつけており、小生が目安としていた55分(1キロ4分半)と比べると明らかに速すぎ、またその次のカテゴリーは1時間(1キロ5分弱)と少し遅いことから、ペーサーについていくことを諦め、スタートラインに立った。

当日のスタート時の気温は24度。6時前だと日影も多く、体を動かさない限り暑さは感じないが、レース後半の6時半以降は日差しも徐々に強くなり、体感温度は相当あがり、大量の汗をかくはずである。幸いにも、6キロと10キロ地点に2か所の給水所が設けられているとの告知があり、水不足の心配はなさそうである。



高架橋を走行中 右前方に圓山飯店をうかがう

どうにか10列目くらいの好位置を確保したが、1キロ4分ペースの集団について行かないように自重を心がけつつも慎重になりすぎないようにスタート。4分30秒のペースを心がけて1キロを通過すると、ようやくペースも落ち着いてくる。ここで、自分のペースメーカーになりそうなランナーを探し始める。ここでの最大のポイントは、経験豊富そうな年配の男性ランナーである。特に風貌としては、後ろから見て安定したフォーム、くたびれたシャツや帽子の着用者が最高の標的となる。なぜなら、彼らは決してオーバーペースにならず、一定のペースで走ることに長けているからである(と私は思っている)。今レースでもなるべく「独走」を避け、ベテランランナーに追従することを心がける。5キロは想定通りの22分26秒で通過し、携帯電話を取り出し撮影する余裕を持って走る。淡水河を渡り、圓山飯店を超えると劍潭の折り返し地点となる。この後の給水では、少し咽たりしたが大事には至らず。太陽も高くなってきたが、刺すような暑さではない。10キロも45分23秒でと想定に近いタイムで通過、高架橋を降りてからのラスト2キロの終盤は、仁愛路に戻り、3KのFun Run参加者と並走するようになるが、コースは分かれており、大混雑に巻き込まれることはなかった。ラストスパートこそかからなかったが、大きな失速をすることもなく、全ての区間で1キロのラップを4分40秒以内でまとめ、55分7秒でゴールできた。

昨年9月に同じコースをほぼ同様の気象条件の中で走ったが、記録が90秒も「進歩」したのは、嬉しい誤算であった。昨シーズンは、2011年にフルマラソンを目標に練習を始めて以来、初めてフルマラソンのベスト記録を更新できなかった悔しい停滞の年であったが、その反省?もふまえ3月以降は、30K走を練習で取り入れた成果ができたものと思いたい。



記念撮影に興じる参加者

3. ゴール後の雑感

ゴール後は、総統府前の広場で、記念品のタオル、飲料と荷物を受け取り、木陰で簡単な着換えを済ませ、少しだけの達成感に浸った後、上位入賞者の表彰式を遠目に見る。そして、帰り際にスーパーオ飲み放題の列に並び、一部の猛者が、5Lのペットボトルを持ち込み、「戦利品」として持ち

帰る姿に苦笑しつつも、筆者は控えめに350CC入りのボトルにスーパーオを汲み帰路についた。

本レースは、格安エントリー費用、交通規制された市街地レースという魅力があり、今後も出場したいレースである。しかし、あえて改善点を提言するのであれば、エントリー費が100～200元高くてもいいので自分の全体的な立ち位置を知るためにもチップの導入を採用してほしい。また、ペーサーを配置するなら、エリートランナー（キロ4分）と一般ランナー？（キロ5分）の間のカテゴリ（自分のような4分半ペース）にもペーサーをつけてほしいというのは、贅沢な望みであろうか。



スーパーオが汲み放題

日本台湾交流協会事業月間報告

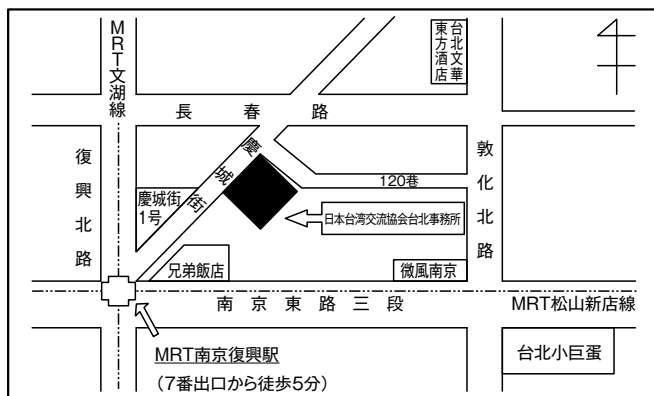
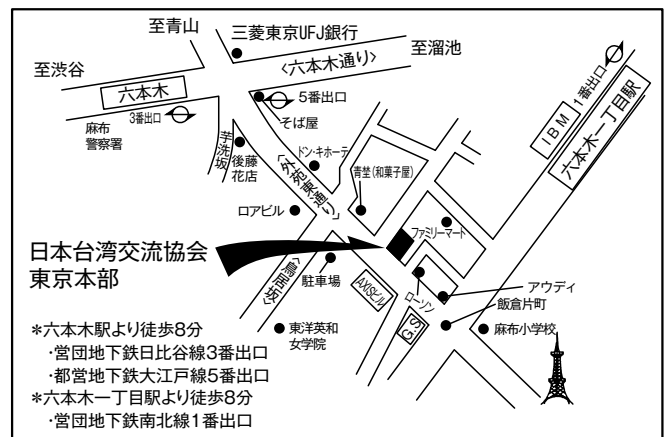
主な日本台湾交流協会事業（6月実施分）

6月	場所	内容	主な出席者（日）	主な出席者（台）
1日	台北市	岩手県主催観光交流レセプション	遠増拓也・岩手県知事, 谷村邦久・岩手県商工会議所連合会長, 花木副代表, 中杉主任（台北）他	張淑玲・台湾日本関係協会秘書長, 林国顯・交通部民用航空局長, 鹿潔身・同部鐵路管理局長 他
2日	東京	第22回理事会, 第10回役員業績評価委員会	沼田代表（台北）, 今井理事長, 舟町専務（本部）他	
2日	台北市	日台スマート産業フォーラム	花木副代表, 大橋主任（台北）	何美月・総統府顧問, 沈榮津・經濟部政務次長, 吳明機・中小企業処長
2～3日	愛媛県	「第10回日台観光サミット in 四国」愛媛県知事・松山市長主催歓迎レセプション、今治市長歓迎レセプション出席	中村時広・愛媛県知事, 野志克仁・松山市長, 菅良二・今治市長小堀守・日本政府観光局理事, 山口範雄・日本観光振興協会理事, 舟町専務理事（本部）	謝長廷・駐日代表, 周永暉・交通部観光局長, 葉菊蘭・台湾観光協会会長
9日	台中市	日本研究青年論壇（現代日本研究学会・台中科技大学共催, 当協会協力事業）	塩澤主任, 高橋専門調査員（台北）	林文程・現代日本研究学会会長, 謝俊宏・台中科技大学校長 他
10日	台北市	台湾日本語継承ネットワーク年次会議出席	谷川主任, 矢崎日本語専門家（台北）	
10日	高雄市	文藻外語大学日本語学科主催「国際研究フォーラム」開会式出席。	藤井省三・東京大学教授, 中郡所長（高雄）	陳立言・文藻外語大学副校長, 林水福・南台科技大学教授, 朱秋而・台湾大学教授, 林淑丹・文藻外語大学教授 他
14日	東京	日本研究支援委員会第一回会合	今井理事長, 柿澤総務部長（本部）, 塩澤主任（台北）他	
14日	台中市	領事出張サービス	谷川主任（台北）	
14日	台北市	貿易経済会議フォローアップ会合	江藤貿易経済部長（本部）, 横田副代表, 宮越主任（台北） 他	蔡偉淦・台湾日本関係協会副秘書長 他
15日	台北市	台北日本人学校第2回夏祭り実行委員会出席	谷川主任（台北）	
15日	台南市	領事出張サービス（於：移民署台南市サービスステーション）	鈴木主任（高雄） 他	
16日	台北市	台北市進出口商業公会70周年記念レセプション	沼田代表, 横田副代表, 相馬主任, 南澤主任（台北）	蔡英文・総統, 陳建仁・副総統, 黄呈琮・台北市進出口商業公会理事長, 鄧振中・政務委員 他
17・18・24日	台北市・台中市・高雄市	2017年度第一回日本語教育研修会「アニメの魅力を生かした新しい日本語教育」	矢崎専門家（講師）, 藤島専門家（台北）, 黒岩専門家（高雄）	台湾人日本語教師
18日	台北市	2017年度第一回日本留学試験		
21～24日	台北市	Food Taipei 2017(ジャパンプビリオン:ジェトロ主催, 当会特別協力)	相馬主任, 南澤主任（台北） 他	
23日	台北市	台北日本人学校学校運営委員と教員との懇談会出席	谷川主任（台北）	
24日	新北市	淡江大学日文系国際学術シンポジウム「キャップストーンプログラムとキャリア教育のレリバンス」(後援名義事業)	塩澤主任（台北）	曾秋桂・台湾日語教育学会理事長 他

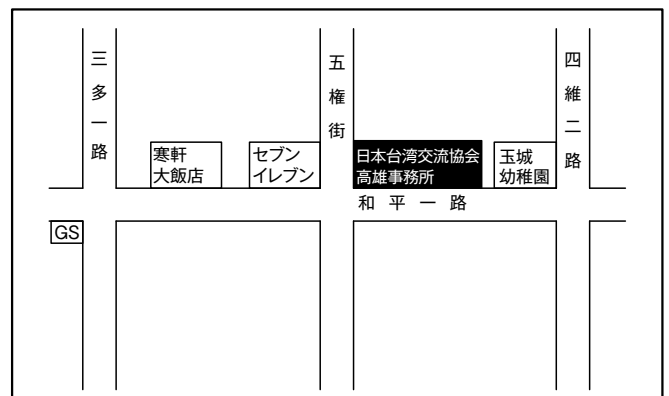
26日	高雄市	アメリカ国慶節祝賀レセプション出席（美国（アメリカ）在台協会主催）	中郡所長，山下次長（高雄）他	美国在台協会高雄分処・杜維浩（Mr. Robert C. Dewitt）処長，陳菊・高雄市長，頼清徳・台南市長，屏東県副県長他多数
27日	台南市	特別展：「地震帯上の共同体：歴史の中の日台震災」の開幕式出席（於：国立台湾歴史博物館）	久留島浩・国立歴史民族博文館館長，中郡所長（高雄）他	鄭麗君・文化部長，王長華・台湾歴史博文館館長他
28日	高雄市	世帝喜旅行社（JTB台湾）高雄市営業所設立開幕式出席	林田充・JTB台湾董事長，中郡所長，山下次長（高雄）	
29日	台北市	日本語パートナーズ台湾一期帰国前報告会	日本語パートナーズ台湾一期5名塩澤主任，白田調整員（台北）他	黄冠超・教育部国際司副参事，洪臨楳・台湾日本関係協会文教組長
30日	高雄市	日本映画「藤田正浩監督作品の特集」記者会出席（共催事業）（於：高雄市電影館）	中郡所長（高雄）	尹立・高雄市文化局長，劉秀英・高雄市電影館長，鄭乘泓キュレーター他

平成 29 年 7 月 25 日 発 行
 編集・発行人 舟町仁志
 発 行 所 郵便番号 106-0032
 東京都港区六本木 3 丁目 16 番 33 号
 青葉六本木ビル 7 階
 公益財団法人 日本台湾交流協会 総務部
 電 話 (03) 5573-2600
 F A X (03) 5573-2601
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

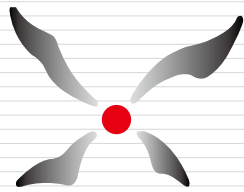
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社
 印 刷 所：株式会社 白樺写真工芸



台北事務所 台北市慶城街 28 號 通泰大樓
 Tong Tai Plaza., 28 Ching Cheng st., Taipei
 電 話 (886) 2-2713-8000
 F A X (886) 2-2713-8787
 URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路 87 号
 南和和平大樓 9F
 9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan
 電 話 (886) 7-771-4008 (代)
 F A X (886) 2-771-2734
 URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



公益財団法人

日本台湾交流協会

Japan-Taiwan Exchange Association

